

日本東アジア実学研究会
第三回読書会

小倉紀蔵

ニムについて 1

- 本日は、趙晟桓(チョ・ソンファン)先生という、いまの韓国でもっとも注目すべき野心的な思想家とわたしたちが対話することができる機会をつくっていただき、片岡龍先生をはじめとするみなさまに、こころから感謝します。
- 趙晟桓先生とわたしがはじめて出会ったのは、もう20年ほど前のことになるかと思えます。わたしは趙晟桓先生には、いろいろと申し訳ないことをしており、いまでも「負債」があると感じております。

ニムについて 2

- 趙晟桓先生！
- この名前を、なんらかの胸の痛みを伴わずに呼ぶことは、わたしにはできないのです。
- わたしは厳密な意味で冷徹な学者であるべきなのに、「韓国に関する、ある部分」に触れると、たちまち弱くなってしまふ。客観的に語るべきなのに、しずかに歌おうとしてしまふ。
- いやむしろ、叫びたくなってしまふ。
- 「韓国に関する、ある部分」とはなにか？

ニムについて 3

- わたしは1980年代から90年代の8年間で、韓国で過ごしました。
- 友人がいました。
- 彼の父は有名な詩人で、朴正熙政権の時代にその詩集は発禁になりました。「だれが空を見たというのか」「殻は去れ」という激烈な詩語でした。酒を飲みすぎて、30代で死んだ詩人です。「錦江(クムガン)」という作品は、東学と1894年の戦争を描いた長大な叙事詩です。

ニムについて 4

- 友人はソウル大学の医学部に入学したのですが、その後、民主化運動に邁進し、「偽装就業」をして、工場労働者とともに地下活動をしている過程で大学を放校になりました。運動は挫け、ほとんどすべてを失って、危ない男になっていました。
- その彼は、わたしと同じ1959年生まれでした。
- わたしは彼の地下生活のすさまじい経験を聞けば聞くほど、「こいつはおれのドッペルゲンガー（自分そのものの異体）だ」と確信するにいたりました。

ニムについて 5

- そもそもわたしは韓国になぜ暮らしはじめたかという
と、はじめて旅行したときに「**ここは異国ではない。
異星だ**」と確信して、この異星でわたしの異体が暮
らしているのだろうという予感を抱いたからです。
- そしてわたしと同じ年に生まれたこの友人と出会い、
わたしはこの男がわたしのドッペンルゲンガーだと思
い込んだのです。

ニムについて 6

- 「韓国に関する、**ある部分**」とは、これに関連します。
- この友人は、わたしと同じ人生の時間を過ごしてきたのに、政府を転覆させようという運動に絶望的なまでに没頭して、そしてなにもかも喪失し、失意の果てに酒にひたって危ない刃物のようにギラギラと眼球を尖らせている。
- それに比べてわたしはのうのうと人生に悩み、のうのうと文章を書き、のうのうと「死にたい」などといい、のうのうと酒を飲み、のうのうと日本人をやっていました。

ニムについて 7

- わたしという人間が生きたり悩んだりしていること自体、贅沢で剰余なのであろう、と思念しました。
- このドッペルゲンガーに、わたしは全的に依存している、という感じがしました。
- わたしがわたしなりに切羽詰まった感じで前のめりに生きていること自体、このドッペルゲンガーの、つまりこのニムの影のふるまいであるかのように思えました。

ニムについて 8

- 1993年2月25日のことでしたが、韓国で金泳三大統領が就任したその日の夜、ソウルの青瓦台のほうで、新政権誕生を祝う花火が大々的に打ち上げられました。
- 軍人出身の暴力的な政権の時代がようやく終わり、あたらしく文民政権が出帆したことを華々しく祝賀したのです。

ニムについて 9

- わたしと友人は、かつての豊臣秀吉軍の本陣であり、いまは駐韓米軍の本拠地となっているソウル中心部の古くて小さな建物のなかからその花火を見ました。
- 「すごい花火だな」とわたしがいうと、友人は、「擾乱だな(요란하다)」とひとことだけぽつりといいました。
- 「恥ずかしいほど大仰で、けばけばしいほど派手でやかましい」という意味です。

ニムについて 10

- わたしは、自分がこれからの人生でつむぎだす言葉（そのころわたしは小説家になろうと思っていました）のすべてが、この友人の「擾乱だな」というたったひとことになわなないだろう、という強い予感をそのとき咄嗟に、感じ取ったものです。
- その夜、安酒を飲み、町に出たわたしたちは、いつになく荒れていました。
- 友人の途方もない虚脱感が危ない感覚でわたしに迫ってきます。友人は怒っていました。すごい勢いで焼酎をあおりました。

ニムについて 11

- わたしは友人に、「君のお父さんが「殻は去れ(껍데기는 가라)」といったのは、日本のことだろ？」と突っかかかっていきました。
- すると友人は、「違う！」といいます。
- 「じゃあなんなんだ。日本は去れ、といっているんだらう？」というと、彼は、「そうじゃない。アボジはそんなことはいわなかった。すべての近代は去れ、といったんだよ」といって、宝石が刃物のようにカットされたような異様に危ない眼で、わたしを睨みました。

ニムについて 12

- 趙晟桓先生の話に戻りましょう。
- こういう言い方をすると大変失礼ですが、わたしは、上記のような経験をした人間として、趙晟桓先生という人間の、内面のマグマのような爆発エネルギーがどこから来ているのかについて、(もちろんほんのすこしですが)、理解できるのです。
- それは、あの時代の「擾乱な」韓国というものを体験したひとの特権とってよいかもかもしれません。
- 趙晟桓先生がわたしの目の前にはじめて現われたとき、周囲の空間が、「ある部分」によってぼんやりと切開されているような気分になりました。

ニムについて 13

- わたしは授業を終えて、自分の研究室に戻るところでした。神奈川県の西の端のほうにある、東海大学で助教授として働いていたときです。
- 研究室がある建物のホールのようなところの椅子に、ひとりの青年がすわっていました。
- 趙晟桓という名前だと名乗りました。彼はわたしが書いた『韓国は一個の哲学である』という本を韓国語に翻訳したい、とあらかじめ提案してきていたのですが、この日、実はもう翻訳原稿をつくったのだ、というのです。

ニムについて 14

- わたしはなにがなんだかわかりませんでした。そして、実はこの本の韓国語訳は、わたしの韓国の恩人がやっている小さな出版社から出すことになっているのだ、というお話をしたと記憶しています。
- このことでわたしは趙晟桓先生に申し訳なく思っているわけです。
- そしてこの青年の雰囲気、なにかただならぬもののように思えました。ここは日本の神奈川県のごく日常的な時空間なのに、なぜかあの不可思議な「ある部分」がだしぬけに噴出したような気配が、漂ったのです。

ニムについて 15

- わたしがその気配の意味を正確に理解できるようになったのは、ずっとあとのことです。
- 金泰昌先生が企画された韓国でのいろいろな研究会やフォーラムで趙晟桓先生といっしょに行動するうちに、趙晟桓先生はわたしに、わたしの友人、あの詩人の息子のような、危ない気配を見せるようになりました。ニムはわたしの場合、つねにギラギラしています。
- 趙晟桓先生は、怒っていました。

ニムについて 16

- その怒りをわたしも、理解できるのです。
- それは、近代にはいって韓国が、というより韓国と日本が営々と築いてきた精神活動全体に対する怒りなのです。
- 「殻は去れ」とかつて詩人が叫んだ、まさにそのことなのです。
- 「だれが空を見たというのか」つまり、近代の韓国や日本に生きるわれわれすべてが、空すらも見ることができずに生きているということへの根源的な怒りなのです。

ニムについて 17

- わたしではなくだれかが韓国で怒っている。
- それは、わたしにとってニムなのです。
- わたしはその怒りを共有しています。
- しかしわたしは、ニムとともに同じ怒りを表明することはできません。
- なぜならその怒りは、ドッペルゲンガーのふたりのうち、ひとりを持つことが許されるが、もうひとは持つことが許されない怒りだからです。

ニムについて 18

- わたしの友人が、「アボジは日本を憎んだんじゃない。そんなことではない」といくら強弁しようと、わたしは友人とその父から許される対象として存在することを拒まなくてはならないのです。
- なぜなら友人がわたしを許すことをわたしが受け入れてしまったら、わたしたちの関係には、尊厳が成り立たなくなってしまうからです。
- 友人もわたしの尊厳を毀損することになるし、わたしも友人の尊厳を毀損するのです。

ニムについて 19

- それは、**尊厳**の問題なのです。
- **ニムの尊厳**です。

三つの生命 1

- わたしが考えている三つの生命
- 〈第一の生命〉＝生物学的生命、肉体的生命
- 〈第二の生命〉＝霊的生命
- 〈第三の生命〉＝美的生命

三つの生命 2

- 〈**第一の生命**〉:客観的生命、相対的生命、物質的生命、個別的生命
- 〈**第二の生命**〉:主観的？生命、絶対的生命、宗教的(精神)的生命、普遍的生命、非物質的生命、集団的生命
- 〈**第三の生命**〉:間主観的生命、偶発的生命、「あいだ」的生命

三つの生命 3

- 〈**第一の生命**〉: ひとつひとつのいのち、このもののいのち、それ自体のいのち
- 〈**第二の生命**〉: すべてのいのち、のりこえるいのち
- 〈**第三の生命**〉: あわいのいのち、立ち現われるいのち

ニムとアニミズム 1

- わたしの名づける〈**第三の生命**〉
- それは、〈**あいだのいのち**〉である。
- 人と人との〈**あいだ**〉、あるいは人ともものとの〈**あいだ**〉、場合によってはものともものとの〈**あいだ**〉に偶発的に立ち現われるかもしれない〈**いのち**〉のことである。
- 〈**あいだのいのち**〉=アニミズム：**崔時亨**
- シャーマニズムは垂直性：アニミズムとはまったく異なる思想：**崔水雲**

ニムとアニミズム 2

- 李奎報の水平的な〈アニミズム〉:「愛物」「与物」
- 崔時亨「天人相与」
- 「人物相与」
- 「万物をニムとして対せ」(趙晟桓)
- →すべてのものやひととの〈あいだ〉に〈いのち〉を立ち現わすこと
- →孔子がやろうとしたこと:孔子の仁とは〈あいだのいのち〉:道徳ではない

「地球倫理」へ

- 服部英二先生は、1973年から94年までユネスコに勤め、思想的な部分で重要な役割を果たしました。
- その間、「科学と文化の対話」「文明間の対話」などの大きなしごとをしました。
- 京都学派の哲学者であった西谷啓治（西田幾多郎の弟子）の最後の弟子です。
- 地球システム倫理学会：みなさんぜひはってください！

「文化の多様性と通底の価値」 シンポジウム(2005年) 1

- 「文化間に通底する(Transversal)価値」
-
- 「通底的(Transversal)」は「普遍的(Universal)」とは異なる
-
- 日本からはアニミズムの価値、美の文明、和＝やわらぐの価値を提唱

「文化の多様性と通底の価値」 シンポジウム(2005年) 2

- 「通底の価値は、二つ以上の文化によって共有されるものであり、普遍的な人間教育、また根源的な「聖なるもの」への志向のような特定の宗教の表現を越え、その根源に遡るものである」(「最終コミュニケ」、79頁)
- →「あわいの智」(服部英二)

近代をどう見るのか

- 近代を軽視するなら、近代を超えられないのではないか
- 疑問：イ・ビョンファン先生「福沢諭吉の『学問の勸奨(=すすめ)』・・・なんと陳腐なのか！」→ほんとうにこれでよいのか？日本の近代体験というものを、もっときちんと理解しないと、それを乗り越えられないのではないか。
-
- 『開闢』の思想家たち(たとえば李敦化など)も、その思考の半分は、近代をめぐるものであった→これを反近代、脱近代としてとらえすぎると、問題が生じるのではないか

開闢とはなにか

- シフトチェンジ、「グレート・リセット」(ダボス会議)、SDGsのような「地球道徳化しようとする資本主義」側の言説とどう違うのか:どのように対抗していくのか
- 共産主義・社会主義や脱成長という思想をどう考えるのか
- マルクス主義者はものをニムとして見ているか？
(趙晟桓)

鶴見和子
内発的発展と生命

鶴見和子 1

- 鶴見和子 【つるみ・かずこ】（1918～2006）
- 上智大学名誉教授。
- 専攻・比較社会学。
- 1966年、プリンストン大学社会学博士号取得。
- 1995年、自宅で脳出血に倒れる。

鶴見和子 2

- 以下は、鶴見和子・川勝平太『「内発的発展」とは何かー新しい学問に向けて』藤原書店、2008に対する小倉紀蔵の書評。『読売新聞』2009年2月。
- 鶴見和子のファンは多い。
- 学問も学問だが、生き様も生き様だから。
- 米プリンストン大学大学院に、初の女性八人の一人として入学、社会学の博士号を首席で取り、その後長く上智大学で教授をつとめた。
- 留学中も帰国してからも、いつでもどこでもきりりとした和服姿である。
- パンとバターが好き。

鶴見和子 3

- 後藤新平の孫娘。
- 品格と厳しさ。
- 77歳のとき脳出血で倒れ、左片麻痺になるが、その後驚異的な生命力で著作集全九巻を刊行し、夥しい数の和歌をつくる。
- 介護付老人ホームにはいっても、右手だけでお気に入りの食事をつくる。
- クルミ入りのサラダ、昆布としいたけのだしのスープ、リンゴと紅茶。
- 二〇〇六年、88歳で生を終え、遺骨は紀州の海へ。

鶴見和子 4

- 彼女の最も有名な学問上の業績は、「**内発的発展論**」の提唱である。
- ごく簡単にいえば、どんな地域にも、よりよい生をいとなむ力がある。
- それは外部からの干渉ではなく内側から、その多様性を保ったまま実現できるのだ、ということだろうか。
- 本書はその「**内発的発展**」について歴史学者の**川勝平太**と語った対談である。
- 小さいが、驚くほどの深みに達した本だ。

鶴見和子 5

- 若いときに唱えた「**内発的発展**」という考えを、今まで全然わかっていなかった、と彼女はいう。
- 脳出血を経験し、一度死んで蘇った今、はじめてそれがわかった。
- 〈自分の生命と花の生命、もう何を見ても生命がここでつながっているという、そこなの〉。
- **倒れたら歌が噴き出した。**
- これこそ本当の**内発性**なのだ。
- 執筆だ、講義だと走り回っていた元気な頃は、外部から動かされて他律的に生きていただけ。

鶴見和子 6

- 感動もない。
- 今は、他律でも自律でもない、無律。
- 〈命が短くなると燃えるのよ〉と別の対談で彼女は知っている。
- 毎日の私が生かされているという不思議。
- 〈だから感動があるの。だから歌ができる〉。
- だから内発的。
- それが恵みなの。